

# 哲学的人間学の新たな方向性の探求

——シェーラーにおける

形而上学的二元論と発生の問題——

小原 拓磨

## 1. はじめに

人間に関する諸科学の研究が大いに進む現代、その膨大な成果から来る過剰な情報の氾濫と価値観の多様化を前にして、思考にはいったいどんな振る舞いが求められているか。その一つに、それら成果を受容しながら人間の全体像を再構築するというものが挙げられるだろう。それは、人間を身体・言語・心理・社会・宗教などの具体的連関において学問的に検討してゆく態度である。こうした学術的志向はすでにカントにより計画されたが（『実用的見地における人間学』（一七九八年））、十九世紀の自然科学の急速な進歩にもとづいた人間に関する科学的知見の飛躍的增加を経て、マックス・シェーラーの「哲学的人間学」の構想によって「人間学」という一応の体系を確立するにいたる。シェーラーは論文「人間と歴史」（一九二六年）で次のように書いている。

いかなる時代といえども今日におけるほど人間の本質と起源についての諸見解が不確実で曖昧で多様になったことはない。(…) おおよそ二万年の歴史のなかで、我々は、人間が徹底的に自身にとって「問題」となった最初の時代にいる。この時代において人間は、人間とは何であるかをもはや知らない。しかし同時に、自分がそれを知らないということを知つてもいる。そこで、一旦この問題に関する一切の伝統をすすんで完全な白紙に還元し、最大限の方法的な無関心と驚嘆の念をもって、人間と呼ばれる実在を眺めるようになってはじめて、我々はもう一度確固たる洞察に到達することができるであらう。(1)

こうした考えのもと、シェーラーは二年後、『宇宙における人間の地位』(一九二八年)において「哲学的人間学」を体系化する。この著作は当時多大な反響を巻き起こし、人間学は哲学のみならず多方面にわたって発展する。なかでも生物学的知見にもとづいた人間学が、H・プレスナー、A・ポルトマン、A・ゲールンといったドイツ語圏の思想において積極的に語られることになった。彼らはとりわけシェーラーの人間学に想定された精神と生命の二元論に焦点を当て、その克服を目指した。けれども、その試みがどこまで成功したのかは実のところ曖昧である。それほどシェーラーの二元論は厄介であり、他方、彼ら以後の科学のさらなる発展によって、人間学という試み自体がもはや時代遅れのものとなったようにさえ見える。けれども、先で挙げたシェーラーの考えは現代でもなお妥当であり、「人間が徹底的に自身にとって『問題』となつた」時代は今なお続いているだろう。したがって本稿では、あらためてこの時代の人間学を振り返り、彼らがそこで残した問題を探り出し、そこから人間学の新たな方向性を示すことを目的とした。

したがって、まず、シェーラーの哲学的人間学を振り返ることから始め(第二節)、その後の生物学的人

問学の展開を概観しながら、シェーラーの二元論の克服の試みをたどる（第三節）。本稿は同じようにこの二元論に焦点を当てて、しかしその克服を目指すということはしない。代わりに、シェーラーの二元論のその厄介さのきわまるどころ、二元論がおのずから動揺する地点に注目する。というのも、そこにおいて新たな問題すなわち「発生」と「他者」の問題が見えてくるからである（第四節）。生物学的人間学においては先送りされあるいは触れられるだけにとどまったこれらの主題が、人間学の新たな可能性を含んでいるだろう、というのが本稿の考えである。そして、発生と他者という一見関係の薄いこの二主題が絡み合うところ、それは「幼児期」である。この契機については再びシェーラーがすでに語っており、したがって、シェーラーにおける幼児の意識状態の叙述をたどる（第五節）。最後に、そこで論じられる問題が後のメルローポントエを通じてさらに深化すること、そしてその課題解決の道が今日の人間学が進みうる新たな方向の一つであることを示唆しておきたい（第六節）。

## 2. シェーラーの哲学的人間学

『宇宙における人間の地位』は、シェーラーによれば、「私の哲学的意識の最初の目覚め以来、他のいかなる問いよりもいっそう本質的なものとして私がたずさわってきた問題」、すなわち「人間とは何か、存在における人間の地位はどのようなものか」という問題に、正面から取り組んだ仕事である。シェーラーが活躍した頃、ドイツは第一次大戦後の混乱した時代であり、ニーチェやキルケゴールの思想を本格的に受け継いだ、ハイデガーやヤスパースのいわゆる「実存哲学」が台頭し始めていた。シェーラーの哲学的人間学も同時期に生まれるが、時代は実存哲学を欲したため、人間学の方は第二次大戦後になって実存哲学が衰微す

るのと並行して、新たに注目されるようになった。

さて、人間の特殊地位は植物と動物との生物学的な比較考察から導かれる。シェーラーによれば、人間を含むすべての生き物は、一つの共通の根源力である「感情衝迫」(Gefühlsstrang)によって支えられている。人間と植物と動物の差異は、この感情衝迫の分化によって獲得される内面性のうちに存する。まず、植物においては感情衝迫は意識も感覚もない「没我的」状態にあるが、動物においては「本能」(Instinkt)の段階へと発展している。動物は本能によって、後天的に学習することなく、自らの種に有意義な環境への適応行動が可能となる。そして、より進化の段階が進むと、本能の上に「連合的記憶」(assoziatives Gedächtnis)が加わり、さらには「実用的知能」(praktische Intelligenz)の段階へと発展する。この知能は、環境への適応を妨げる未経験の問題状況を解決する能力であり、この意味で、知能は人間に固有の能力というわけではない。もちろん人間においてそれは高度に進化しているが、動物にも認められるそれと比較して、相対的に高度であるにすぎない。シェーラーはケーラーのチンパンジーの知能実験の成果にもとづいて、「賢いチンパンジーと、ただ技術家としてのみ見られたエジソンとの間には——たとえどんなに大きい差異であるにしても——ただ程度の差異があるにすぎない」と述べる。

それでは、何が人間をして人間たらしめているのであろうか。人間にあってチンパンジーに欠けているもの、それはシェーラーによれば、人間・動物・植物が共に属している生命の流れには由来しない、生命の流れと衝動に対抗する、「精神」(Geist)である。この精神が、「すべての生一般に、否、人間の生に対してすら対立する原理」として、人間の本質として立てられ、かくして宇宙における「人間の地位」が明確に定められる。

感情衝迫に根ざす単なる知能に従った行動が、もっぱら生に奉仕するためだけの衝動的行動であるのに対して、精神の基底には作用中心としての「人格」(Person)がある<sup>8)</sup>。動物が自らの環境をもち、本能によってそのなかに組み込まれているのに対し、人間は世界から距離をとってそれを「対象」として捉えることができる。すなわち、人間は一つの人格として環境を越えて世界に対して開かれている。「人間とは、無制限に『世界開放的』(weltoffen)に行動することのできる、未知数Xである。人間に成るといふことは、精神の力によって世界開放性へと高まることにほかならない<sup>9)</sup>」。動物がどこまでも本能と環境世界に拘束されているゆえに歴史性をもたないのに対して、人間は精神のおかげで、過去と未来を現在において統合しつつ、環境世界を対象化し、自由にそれと関わりながら、それを無制限に突破していくことができるのである。

### 3. 生物学的人間学の展開

シェーラーが開いた人間学の地平はここから、プレスナー、ポルトマン、ゲーレンを通して、生物学的な水準で発展してゆく。彼らの主眼は主に、シェーラーが立てた形而上学的二元論をいかに克服するかであった。

#### a. プレスナーの人間学

シェーラーが哲学的人間学を発表した同年、プレスナーもまた『有機体の諸段階と人間——哲学的人間学入門』(一九二八年)を出版している。形而上学に傾斜しがちなシェーラーとは違って、プレスナーは綿密な生物学的調査にもとづいて人間を考察する。プレスナーは、精神と生命(衝動)の二元論にもとづくシェーラーの人間学から距離をとり、また、人間の身体的側面を無視する実存哲学を批判するかたちで、生物学的

事実にもとづく「人間生物学」の方へ向かう。

プレスナーによれば、まず、植物は周囲世界のなかに組み入れられており、その生命圏から独立しておらず、つまりその一部となっている。これに対して動物は、自己を周囲世界に間接的に組み入れつつ、その生命圏から独立に生存している。それゆえ動物は行動の中心点を自己の内にもち、そこから外に向かって生きている。しかし、動物は中心としては生きていない。言い換えれば、動物は「自己」として生きていない。動物は自分の身体に対する距離がないため、自己を体験できず、すなわち反省できない。これに対して人間は自己を反省することができ、それゆえ中心として生きることが出来る。人間は自己(中心)から脱けて、自らを反省し、自己を自己として体験できる。要するに、反省の操作が分水嶺であり、人間にのみ可能なそうした在り方——シェラーにおいて「精神」とされたもの——を、プレスナーは「脱中心性」(Exzentrizität)と呼ぶ<sup>(10)</sup>。プレスナーは、「精神」のような出所不明な形而上学的観念ではなく、あくまで精神科学の方法にもとづいて、人間をその自己了解から解釈するのである。

#### b. ゲーレンの人間学

シェラーにおける形而上学的二元論には同様に批判的立場をとりながらも、ゲーレンにとっては、プレスナーの「脱中心性」という概念もまだ十分に「形而上学的」に見えた。シェラーとプレスナーの著書出版から十二年後、その間の生物学の発展による成果にもとづいて、ゲーレンは『人間』(一九四〇年)で人間を「欠陥存在」(Mängelwesen)として定義した。

ゲーレンによれば、人間は生物学的に特殊である。なぜなら、人間以外の生物が純粹に生物学的に自力で

その生存を維持していくことができるのに対して、人間は基本的な欠陥によって特色づけられるからである。<sup>①</sup>たとえば、人間には皮膚を覆う体毛がほとんどなく、それゆえ気象の変化から身を守るものが欠けている。また、人間には生得的な攻撃器官もなく、逃走に適した身体形態もなければ、感覚器官の鋭敏さに関してはぼすすべての動物よりも劣っている。そうした生物学的欠陥を補償するもの、生の「負担を免除する」(entlasten)ものこそは、ゲーレンによれば、「精神」である。

人間は様々な生物学的欠陥のために、環境世界から特定の刺激だけを受け入れるのではなく、無数の刺激に無差別にさらされており、不完全な本能のゆえに自動的に環境世界に適應することもできない。人間はまさしく「負担過剰」(belastet) になっている。精神がこの負担を軽減する。精神は生存を維持するために人間の欠陥を補償する。その結果として現れるものが「行為」と「言語」であり、それどころかすべての文化領域である。精神とは、したがって、生命と対立するのでも、生物学的なものの上にそれと無関係に独立に舞い降りるものでもない。そうではなくて、生物学的な欠陥を補償することこそが精神の任務であり、精神はそのように生物学的なものに奉仕するために存在する、とゲーレンは考える。

### c. ボルトマンの人間学

ゲーレンのこうした思想に対して、プレスナーは批判的である。プレスナーからすると、ゲーレンは人間を単に行動の観点からしか分析しておらず、その行動主義的な人間学はむしろ人間の水準を引き下げる試みである。<sup>②</sup>また、精神が生物学的欠陥を補償するという考えは、たしかに精神と生命の実際的な関係を際立たせることに成功しているが、けれども、そこで語られる精神に対する生命の優位というゲーレンの主張は結

局シェーラーの主張の裏返しでしかなく、この意味で、いまだ二元論は完全には克服されていないように見える。そこでプレスナーは、同じ生物学主義でも、ゲーレンよりポルトマンを評価する。

ポルトマンの学説は人間における「子宮外早生の一年」という生物学的事実を軸に構成される。まず、哺乳動物の誕生時の状態を比較研究した結果、哺乳動物には、誕生と同時にすでによく発達しており、たくましく有能な姿で生まれてくるものと、誕生時においてはまったく何もできず無力で無能な姿で生まれてきて、かなり長期間にわたって成体（おとな）の保護を必要とするものがある、という事実にはポルトマンは気づいた（上記のゲーレンの主張はこうしたポルトマンの仕事にもとづいている）。前者には、クジラやイルカなどの大型の海洋哺乳動物、牛や馬などの有蹄類、サル類やゴリラ、オランウータン、チンパンジーなどの類人猿が属し、後者には、鼠、兔、猫や犬などが属する。人間は、両者にまたがって属する。というのも、人間は、出産時に目や耳などの感覚器官が開かれるかぎり以前者に属する一方で、そうして生まれた新生児はにもかかわらず無力であり、後者の哺乳動物たちと同様、親（大人たち）の保護を必要不可欠とするからである。ポルトマンによれば、人間が誕生後直ちに自立的に活動できるためには、本来、妊娠期間は九ヶ月ではなく二十一ヶ月でなければならぬ。要するに、人間は生理学的に常態化された早産であり、言わば母胎外での胎児期を過ごしているのである。

ここからポルトマンは、この「子宮外早生の一年」に新生児が人間に固有の三特徴——立つこと、話すこと、考えること——を獲得することに注目する<sup>18</sup>。誕生直後、新生児は話すことはもちろん、立つことさえできない（大人ほどに考えることも）。これゆえに人間の新生児は見かけ上きわめて無力であり、寄る辺なく在る。ゲーレンからすればそれは人間の「欠陥」であるが、しかし、ポルトマンからすれば反対にそれ



は積極的な意味をもつ。もし人間がチンパンジーなどのように生存維持の能力を十分発達させたうえで誕生したとすれば、新生児は社会的接触や学習なしに生き始めるだろう。言い換えれば、人間はの場合本能に従って、すでに決定された行動様式にほとんど縛られて活動することになるだろう。つまり、人間が早産児として無力なままに産み落とされ、母親を中心とする人間関係（家族や共同体）に依存せざるをえないという事実は、欠陥であるどころかむしろ、人間が単なる本能的行動に縛られず、最初から自由な行動様式に開かれていることの反映なのである。ポルトマンは、こうした人間的特性を「世界開放性」(Weltoffenheit)と呼び、動物における「環境束縛性」と対置する<sup>④</sup>。

#### 4. 二元論の動揺と発生の問題

ポルトマンのこうした人間像によって、ゲーレンが立てた生命優位の図式が反転する。ゲーレンは精神の機能を人間の生物学的諸欠陥を補償するもの、負担を軽減するものとみなすことで、精神を身体（生命）の付加物としたが、ポルトマンにおいては精神と身体の関係はそうではない。人間の、とくに新生児に見られるような生物学の特殊性それ自体は、人間存在の精神的独自性の発現の条件であり、端的に、その身体的な現れである。身体的生成は初めから精神的法則に従属しているのである。

だがそうすると、人間学は結局、シェーラーの人間像へと再び戻ってきたのではないだろうか。実際、人間の特性としての「世界開放性」ということでポルトマンが言わんとするのは、シェーラーと別のことではないだろう。この語において両者が共通して考えているのは、人間における環境への非束縛性であり、そこから離脱可能性である。人間はどのように脱環境的な存在者としてつねに別の世界へと開かれており、同

時に新たな世界を形成することさえ可能である。また、この世界開放性を可能にしているものがシェーラーの言う「精神」であり、プレスナーにおける「脱中心性」であるとしたら、はたしてポルトマンにおいて形而上学的二元論は乗り越えられたと言うことができるだろうか。

けれども、他方、ポルトマンが指摘した「子宮外早生の一年」の問題はなお重要である。そこで問題とされているのは精神的特徴（直立・言語・思考）の発現であった。それは言い換えれば自我の芽生えであろう。プレスナーの言葉でいえば、自分自身に距離をとり、中心から脱け出て、自己を客観的に観察できるようになる、その萌芽である。二足歩行を試み、言葉を話し始め、思考し始めることは、自己を抜け出して、自己を意識し始める時期とほぼ重なる。そうすると、ここで問題となっている事柄とは精神の発生ではないだろうか。自我を芽生えさせること、それこそは「子宮外早生の一年」の時期における幼児の最大の課題に他ならないだろう。

たしかにその通りだ。しかし、ここで注意しなければならないのは、シェーラーにおける精神と生命の二元論は、同時に、「人格」(Person)と「自我」(Ego)の二元論でもあるという点だ。シェーラーは、心的なものとの身体的なものは生という同一の事象の二つの側面にすぎないという観点からデカルトの心身二元論を批判し、心身(生)と、それらを対象化して考察しうる精神という、より高次の対立を主張する<sup>(15)</sup>。そして、その高次の対立の両項それぞれにおいて中心となるものが、一方で精神の中核としての「人格」であり、他方で心身的なものの中核としての「自我」である。この両項の決定的な差異は、シェーラーによれば、「対象」となりうるかどうかである。自我が「心理学」のような仕方に対象化されうるのに対し、精神は対象化されえない<sup>(16)</sup>。「すべてを対象化し自らは対象とはならない精神」は「作用」(Akt)であり、そして多様な人

間的作用を統一的にまとめる作用の中心として、「人格」である。

シェーラーのこうした区別（対立）からすると、「子宮外早生の一年」でその誕生が問題とされているものもつばら「自我」であり、精神ないしは人格ではなさそうに思える。実際、シェーラーは人格の成立条件として「成年性の根本現象」を挙げており、無条件に人間一般に（それゆえ幼児にも）人格を認めているわけではない。そしてこの「成年性の根本現象」とは、シェーラーによれば、「自己の作用や意欲や感情や思惟と、他人のそれとの間の相違の洞察」を体験しうることであり、要するに、自己と他者を同一視する幼年期を脱して初めて人は人格となるのである。したがって、幼児が自我をもち始めたからといって、シェーラーからすればそれは精神の発生ではないだろう。

だがしかし、それでも疑問は残る。そもそも人格と自我はそれほど明確に区別できるのだろうか。とりわけ人格ないし精神が「作用」として規定されるならば、自我とはまさにその作用の効果あるいは結果であり、その意味で、自我の発生においては精神もまた少なからず発現しているのではないだろうか。事実、決定的なことに、シェーラー自身もまた、（対象化）作用とその集中ないし中心としての精神を「自己意識」と呼んでいる<sup>20</sup>。そうであるならば、幼児の自我の芽生えは自己意識の芽生えとして精神の萌芽とも考えられるのではないだろうか。あるいは、自我と自己意識もまた区別され、やはり先ほどの図式（精神／生命、人格／自我）に即して対立することになるのだろうか。だがその場合、「対象化可能性」という基準で、両審級はそこまで明確に区別できるのだろうか。この点についての詳細な議論はさしあたり見当たらず、それゆえここにおいてシェーラーの形而上学的二元論は綻びを見せるように思える<sup>21</sup>。

とはいえ、冒頭で述べた通り、本稿の目的はシェーラーの形而上学的二元論を「克服」することではない。

問われるべきは、シェーラーの形而上学的二元論はなにゆえここで動揺するのか、ということである。そしてその理由は、言うまでもなく、ここにおいて精神の発生すなわちその二元論そのものの誕生が問題となっているからである。そして、シェーラー以後の人間学が二元論を克服しようとして強調した「脱中心性」、「欠陥存在」、「子宮外早生の一年」といった概念が、同様にこの契機をめぐって考えられていることは偶然ではない。つまり、人間学は人間の幼児期の問題を発見し、その重要性に気づいたにもかかわらず、二元論の克服にばかり気を取られ、その発生の問題を見過ごしてしまっただのである。

そうした発生的観点から比較したとき、反対に、シェーラーが積極的にこの問題に分析の目を向けていることは注目値する。事実、正当にも彼は人格・精神の成立条件として「成年性の根本現象」を挙げている。精神と生命、人格と自我という二元論の構築のためには、何よりもまず人間は成長しなくてはならない。そしてその成長とは、再びシェーラーによれば、自己と他者の区別がつくことであった。もちろんシェーラー自身は二元論の発生の問題としてそうした自他の区別を論じているわけではないが、ここまでの議論から、本稿では、幼児が他者を他者として認識できるようになること、それこそがシェーラー的・二元論の成立条件であると考えた。したがって最後に、シェーラーによる幼児的意識の分析をたどってみたい。

##### 5. 自他未分化の体験流と身体の対象化

幼児の生活は基本的に、環境世界と家庭および民族など、幼児の周囲の力によって支配されている。シェーラーによれば、そこでは「家霊」(familiärer Geist)が幼児に入りこみ、幼児は催眠術にかけられたような状態にある<sup>(2)</sup>という。シェーラーはこうした幼児的な心的状態を「自他未決定の体験流」(indifferenter Strom der

Erlebnisse) と呼ぶ。

自我・汝に關してはある未決定な体験流が「さしあたり」そこに流れている。この流れは、事実、自分のものと他者のものとを区別せず、相互に混合した形で含んでいる。「…」すなわち、「さしあたり」人間は自己自身においてよりも他人においてより多く生きているし、彼の個体におけるよりも共同体においてより多く生きている [Das heißt: 《Zunächst》 lebt der Mensch mehr in den anderen als in sich selbst; mehr in der Gemeinschaft als in seinem Individuum]<sup>(82)</sup>。

この根源的な未分化状態においては、したがって、他者の認識は自己認識に伴われている。幼児にとつて、目に見える他者たちは自分であり、自分はその他者たちである。こうしたナルシズム的独我論から脱け出て、他者が他者として認識されるようになるのはもっと後、反省的な自己認識が誕生してからである。そのように自己が発見される以前のこの時期では、したがって、子供は長らく他者との心的融合の状態で生活していることになる。それが幼児の心的状態である。

以上の分析は一見、「感情移入」の理論に接近しているかのように見えるが、実際にはまったくの反対である。感情移入説であれ、類推説であれ、まず第一にそこでは大人の認識を問題としており、つまりある程度自立した自我や自己意識がすでに前提され、それらを出発点にして他我や他者が志向されているだろう。そこでの問題は、それゆえ、自他の区別が成立した状態からの他者理解である。これに対して、ここで問題としているのはこの自他の区別が成立する以前の領野であり、この幼児的意識野ではむしろ反対に他者の意

識が自己意識に先行している。さらに、これが最も重要な点であるが、シェーラーによればこの幼児的な心の状態は大人の他者認識の基底<sup>26)</sup>でもある。幼児に見られる自他未分化の心的状態は、他者認識一般の根底に見出される領域なのである。幼児の他者覚覚について同様に分析するメルローポンティが言うように、「もし大人にとって唯一の間主観的世界が存在するはずだとしたら、大人の思考の底には、不可欠な獲得物として、一歳児の野生の思考が存続しているのでなければならぬ<sup>27)</sup>」。

幼児的意識の分析に戻ろう。幼児はそうした心的生の全体的「一体感」ないし「流れ」を体験しながら、他者との未分化な忘我的同一化状態を過ごしている。けれども、そうした「催眠状態」から幼児はやがて目覚め始める。シェーラーによれば、幼児はこの心的生命の流れのなかからゆっくりと「自己自身の精神的頭〔geistiges Haupt〕をもたげ始め<sup>28)</sup>」、徐々に自分の環境世界から距離をとり、客観化するようになり、同時に自己自身を発見するにいたる。幼児がそのように個別的な自己意識に到達し、自他の分化を成就すること、これこそがシェーラーの二元論がその成立のために必要不可欠とする事態である。

それでは、この自他の分化はいかようにして果たされるか。シェーラーは別のところで人格の所在について説明するさい、次のように述べている。人格は「自己の身体に対する支配が直接的に内部に現象しに来ており、自己自身を直接的に自己の身体の主人として感じ知り体験している人間に属する<sup>29)</sup>」。つまり、自己の身体と自己自身とを区別している者、身体を「私の身体」として意識し、その欲望を支配できる者にこそ、人格は属する。それゆえ反対に、それができていないものは自己の身体（の欲望）の奴隷であり、そこに人格は見出されえない。人格の成立、すなわち精神の発生（二元論の成立）を引き起こす自他の分化は、したがって、身体の対象化と連動している。

## 6. おわりに

かくして、シェーラーの二元論あるいは精神・人格の発生は——あるいはその後の人間学の概念で言えば、「欠陥存在」が「子宮外早生の一年」において「脱中心性」を獲得するのは——、自他の分化をその成立条件とし、そしてその分化は身体の対象化を契機として起こるだろう、と一応の結論をつけることができる。身体（と人格の連動）の問題はけれども、シェーラーにとっての中心的主題ではない。この主題を積極的に取上げるのは、言うまでもなくメルローポンティである。メルローポンティもまた『行動の構造』（一九四二年）において人間学的研究を展開した一人だが、後の「幼児の対人関係」（一九五一年）は前節で論じた自他未分化の次元とその分化の問題をシェーラーより以上に深く追究している。<sup>(8)</sup>

そうしたメルローポンティの仕事によって問題はさらに深化することになった。メルローポンティはそこで「他者のまなざし」という契機を導入するが、これによって問題は知覚の問題に通じ、また、他者のまなざしであるかぎり、「他者」の問題もまたここで浮上するだろう。しかもそれは一般的な他者認識の次元ではなく、上で見たように、そもそもそれを可能にするような根本的な次元の他者である。あるいはまた、身体のこの対象化（ひいては自他の分化）の失敗ということについて、病理学的観点から考察される必要もあるだろう。それはちょうどポルトマンが指摘した、「社会の成り立つ必須の前提でありその使命でもある」社会的援助の欠如であり、その結果としての人間性の不完全化である。<sup>(9)</sup>

以上はそれぞれ大変に困難な課題であるが、これこそは新たな人間学の可能性ではないだろうか。すなわち、こうした問題について、形而上学的二元論からある種まったく自由に、諸科学の成果を取り入れながら考察することが、結果として、人間学の進みうる実り多い道の一つであるように思える。実際、そうした自

私の発生をめぐる考究は、たとえば今日の機械（人工知能）の自我問題にまで通じることができらるだろう。本稿はそのように考えている。

註

- (1) Max Scheler, *Gesammelte Werke*, Band 9, *Mensch und Geschichte* (1920), Bern: Francke, 1976, S. 120. 「哲学的世界観」 亀井裕・安西和博訳、『シェラー著作集』第十三巻所収、白水社、二〇〇二年（新装復刊版）、二二八—二九頁。ハイデガーもまた同旨の見解をシェラーに献呈した『カントと形而上学の問題』で語っている（M. Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd. 3, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1991, § 36）。
- (2) 実際、彼らの主張は「すでにその歴史的役割は終えている」（野家啓一編『シリーズ ヒトの科学6——ヒトと人のあいだ』岩波書店、二〇〇七年、x頁）、<sup>1</sup>とさえ言われる。そこで言われている通り、現代の問題はもっぱら機械（人工知能）と人間の差異であろう。けれども、本稿では以下本文で述べる目的からさしあたりこの問題は保留する。
- (3) M. Scheler, *Gesammelte Werke*, Bd. 9, *Die Stellung des Menschen im Kosmos* (1928), Bern: Francke, 1976, S. 9. 「宇宙における人間の地位」 亀井裕・山本達訳、『シェラー著作集』第十三巻所収、一一頁。なおこの著作は、翌年刊行予定だった『哲学的人間学』の「若干の主要点に関する私の見解を簡潔に、<sup>2</sup>きわめて圧縮した形でまとめたもの」（*op. cit.*, S. 10 [同上])である。シェラーの急逝により、その予定は実現しなかった。
- (4) ハイデガーは『存在と時間』を一九二三年に着手し、一九二六年に完成、一九二七年に出版。ヤスパースは『哲学』の著述を一九二四年に開始し、『世界観の心理学』（一九二五年）でその「構想」を発表し、一九三二年に全三巻を完成。シェラーはそれらより少し早く、一九一九年に『人間の理念のために』、一九二一年に『人間における永遠なるもの』<sup>3</sup>、そして一九二八年に『宇宙における人間の地位』を発表し、同年死去している。
- (5) M. Scheler, *op. cit.*, S. 15. 「前掲訳書」一一頁。
- (6) M. Scheler, *op. cit.*, S. 31, Anm. 1. 「前掲訳書」四七頁。
- (7) *Ibid.* [同上]。
- (8) M. Scheler, *op. cit.*, S. 32. 「前掲訳書」四八頁。
- (9) M. Scheler, *op. cit.*, S. 33. 「前掲訳書」五一頁。



- (10) 「この生体〔人間〕は自己自身を所有し、自己について知っており、自己自身に気づき、その点で自我として存在し、『自己の背後に』存在する自己の内面性の消失点であり、この点は自己の中心から遠ざかって、生命の一切のありうる遂行に対しこの内面の領域の情景を眺める観察者となっているため、もはや客観化されえない、もはや対象の位置に移りえない主体の極」(M. Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch: Einleitung in die philosophische Anthropologie* (1928), Berlin: W. de Gruyter, 1975, S. 290)。
- (11) 「人間はすべての高等哺乳動物とは異なって、形態的にはとりわけ様々の欠陥によって規定されている。その欠陥とは、そのほど厳密に生物学的な意味での不適応性、非特殊化性、原始性すなわち未発達であることとして、特徴づけることのできるもの」(A. Gehlen, *Der Mensch, Seine Natur und seine Stellung in der Welt* (1940), Frankfurt am Main: Athenäum, 1971, S. 33) 『人間：その本性および世界における位置』平野貞男訳、法政大学出版社、一九八五年、三二頁)。
- (12) H・プレスナー「生きものとしての人間」、ホルノー & プレスナー他『現代の哲学的人間学』所収、藤田健治他訳、白水社、一九七六年、七〇頁。
- (13) 「決定的なのは、つきのことである。すなわち、自然の諸要因のいまのところは未知の共同作用によって人間が一年早く生まれてくるということは、人間の最も重要な特徴——立つこと、話すこと、考えることという三主徴——が社会環境との接触によってはじめて形成されていくということと、関連して考えられねばならない」(A・ポルトマン『生物学から人間学へ』八杉龍一訳、思索社、一九八一年、九六頁)。
- (14) 「とはいえ、原則として場所も生活形態も変化させることができるという能力は、やはり人間にとって特質的である。すでに一八世紀において、人間の思考と行為のこの幅広さにたいして『世界開放的』という言葉が使われており、それでの概念を動物の『環境束縛性』と対置させようと思ったのである」(ポルトマン、前掲書、一一六頁)。
- (15) M. Scheler, *Stellung des Menschen*, op. cit., S. 62. [前掲訳書、九五頁。]
- (16) 「『自我』は「[...] 自身自身お一つの対象である。これに対して「人格とその」作用は決して対象ではない。[...]」というのは、作用を(素朴な)実行を越えてさらに知られうるものとする反省においても、作用は決して『対象』ではないのであり、反省知は作用に『随伴』するが、作用を対象化するものではないからである」(M. Scheler, *Gesammelte Werke*, Bd. 2, *Die Formalismus in der Ethik und die materiale Wertehik* (1913-16), Bern: Francke, 1966, S. 374) 『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』第三卷、吉沢伝三郎他訳、白水社、二〇〇二年、二〇頁)。
- (17) M. Scheler, *Stellung des Menschen*, op. cit., S. 62. [前掲訳書、九五頁。]
- (18) M. Scheler, *Formalismus in der Ethik*, op. cit., S. 472. [前掲訳書、一七〇頁。]
- (19) ブーバーがまさにこの点でシェラーの二元論に反対している。「幼児はしゃべるときに初めて『才気にあふれる』haben

- Geist) のであり、しゃべろうと意志することによって、才気にあふれるのである」(M. Buber, *Das Problem des Menschen*, Heidelberg: Schneider, 1948, S. 147 『人間とは何か』児島洋訳、理想社、一九六一年、一五六頁)。
- (20) 「われわれはこの作用を『集中』と名づけ、またこの集中とその目標と、『自己集中』の目標とを一括して『精神的作用中心のおのれ自身に関する意識』ないしは『自己意識』と名づけようと思う」(M. Scheler, *Stellung des Menschen*, op. cit., S. 34 (前掲訳書、五一―二頁))。
- (21) ここから、後期のシェラー思想に二元論の傾向を見る向きもある。『人間の地位』にいたると、この二元論の構成は一元論的な形而上学の傾向を深め、人格的契機が希薄化していく(金子晴勇『マックス・シェラーの人間学』創文社、一九五五年、一四五頁)。
- (22) 「子供として自分自身の生活は、『家霊』に溶け込んでしまっているので、さしあたりほとんど完全に隠されている！子供はこのような事実上の生活環境の諸々の理念や感情によって忘我的に自己を喪失しており、催眠術にかけられている状態である」(M. Scheler, *Gesammelte Werke*, Bd. 7, *Wesen und Formen der Sympathie* (1913), Bern: Francke, 1973, S. 241 「同情の本質と諸形式」青木茂・小林茂訳、『シェラー著作集』第八卷、白水社、二〇〇二年、三九五頁)。
- (23) M. Scheler, op. cit., S. 240f. (前掲訳書、三九四―五頁)。
- (24) 「私たちが自己自身の自我を捉えるのは、つねに、たえず不明瞭になりながら一切を包括する或る意識を背景としている。背景にあるこの意識においては、自我存在もあらゆる他人の体験も原理的に《共に含まれている》ものとして与えられてこそ」(M. Scheler, op. cit., S. 244 (前掲訳書、四〇〇頁))。
- (25) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception* (1945), Paris: Gallimard, 2005, p. 413.
- (26) M. Scheler, op. cit., S. 241. (前掲訳書、三九五頁)。
- (27) M. Scheler, *Formalismus in der Ethik*, op. cit., S. 472. (前掲訳書、一七一―二頁)。
- (28) M. Merleau-Ponty, «Les Relations avec autrui chez l'enfant» (1951), in *Parcours 1935-1951*, Lagrasse: Verdier, 1997. (幼児の対人関係)、『眼と精神』所収、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、一九六六年)。「メルローポンティによれば、幼児は「鏡像体験」を経て、「他者のまなざし」によって自己の身体の決定的な対象化を経験する。
- (29) 「新生児に対する集団の助力、すなわち愛情をもって世話が確かななされないと、姿勢、会話、精神的生活、思考が、完全な人間性にみちびく軌道から外れていってしまう」(ポルトマン、前掲書、九六頁)。

(おぼら たくま・東北大学文学研究科専門研究員)